

2004  
04.01

vol. 61



社団法人日本建築家協会  
The Japan Institute of Architects

# NAGANO

<http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/>

## -KEN CLUB

JIA 長野県クラブ

### 温故知新

—昔のまちの良さは井戸端会議、これからはユニバーサルデザインによるまちづくりでコミュニティ再構築—



古い話で恐縮ですが、昭和20年代生まれの私を含む多くの人たちは、戦後の復興期の匂いをどこかに感じながら豊かな国づくりをと、頭の隅に浮かべ「住み良いまち」を目指して生きてきたのではないかと思います。

列島改造論から始まりオイルショック、円高、バブル景気と様々な社会の変動期を経て、今日に至ったのは多くの方も容易に思い起こせると思います。

最近思うのですが、車窓から眺める景色にいつの間にかあまり感動を受けなくなっていました。最初は見慣れてしまったのだろうと高(たか)を括(くく)っていたのですが、どうもそうではないような気がします。それは、どこへ行ってもほとんど代わり映えのしない景色しか目に映りません。ちょうど電車に乗っているこのレールの上のように、高度成長期と合わせて行政の敷いたレールの上を私達は走ってきたのではないかと。

そして、経済効率を高めるために、なんとか空間を新しくし無駄なく隙間を埋めることに熱中してきたのです。その結果、多くの貴重な有形・無形の財産を失ってきたのではないかと思うのです。

昔、「まち」が栄えていた頃を振り返りますと、朝の挨拶から始まって、近所の人の井戸端会議や、その周りを日焼けした子供達が遊び廻っていました。小うるさいおじいちゃん達も居たりして、どことなく「まち」に活気がありました。

職住接近もあり、「まち」には「自分のまち」という雰囲気が確かにあり、それに伴って人々の間に残るわずかばかりの自然も、「まち」の人々に大事にされ、四季折々の香りが私達を包んでいました。

今、まちを改めて眺めてみると、そうした「まち」の自然もただ埃(ほこり)を被ってくすんで見えますし、飛び跳ねている子供の姿も、小うるさいおじいちゃん達の姿も記憶の片隅に残っているに過ぎませ

ん。いつの間にか、高度成長期の機能優先の考え方方が、老人は老人、子供は子供、車は車というように整然と区割りをしてきました。

温故知新という言葉があります。広辞苑には、「昔の物事を究(きわ)めて、新しい知識や見解を得ること」とあります。高齢者も子供も、そして何らかの障害を持ってしまった人も、すべて人が当たり前に普通に暮らしていく「まち」は、既に私達の過去に実在していました。ここにはバリアフリーなどという言葉はありませんでした。機能優先、障害を持った人には障害者用という隔ては、結果として「まち」の文化育成に欠かせないコミュニティを壊して来たのではないでしょうか。車椅子の方は、玄関の横をどうぞというスロープもバリアフリーという名のもとに心理的なバリアを生み出しました。

いま取り組むべきことは、「すべての人が当たり前に普通に暮らしていくまちづくり」を目指し、ユニバーサルデザインの視点で「まち」を見直すことだと考えています。

ユニバーサルデザインは「Design for All (すべての人のためのデザイン)」にその考え方が凝縮されています。子供も老人も妊婦も障害を持った人も健常の人も、差別はありません。すべての人が年を取れば高齢者になるのが当然なように、人にはもともと区分けが不要だったのです。ですから、健常者は正面の階段を、車椅子の方はその横のスロープをという考え方はバリアフリーではあってもユニバーサルデザインでは、車椅子の方に心理的なバリアを与えるという考え方は採用されません。一緒に同じ所から気兼ねせずお入りくださいということが重要なのです。

この視点で見れば、私達を取り巻く生活環境も社会環境も自然環境も、暮らしていくことが楽しくなる「まちづくり」を可能にし、多くの世代が集う「まち」にはきちんと経済効果も付いてくるものなのではないかと考えています。

上村 保弘

# ～特集～ 繼続から飛翔へ（JIAと私の明日）

## 私にとってのJIA

36歳で17年間の東京生活に終止符を打って郷里の飯田にもどつての数年間は、私にとって一番つらい時期でした。無資格で帰郷したため独立して事務所を開くのに3年、事務所は開設したものの地縁も人脈も無く、悶々として過ごしていました。又、「出る釣は打たれる」の例え通り、同業者にはまともには受け入れられず、そのうえ、建築のことを語り合える仲間さえほとんどいませんでした。

そんな時、誘っていただいた長野県建築設計監理協会に加入し、宮本忠長会長はじめ県内で活躍する建築家の方々の仲間入りをさせていただきました。そして数年後、設・監・連と旧日本建築家協会が同時に解散し新日本建築家協会の誕生に立ち会うことになりました。京都国際会議場での設監連大会における、池田武邦さんの「両会を同時解散し、一同団結しよう！」という提言に身震いし、続いて東京赤坂プリンスホテルで丹下健三初代会長の新日本建築家協会の船出の挨拶に感動して聞き入ったことが、昨日のように鮮明に思い出されます。

あれから15年が経ちました。この間、日本中に多くの建築家仲間を得て自分がJIAによって育てられてきたことを痛感し、深く感謝する次第です。そして今、地域会「JIA長野県クラブ」も諸先輩、魅力的で多様なメンバーのお陰で活発な活動は、支部でも評価されるようになりました。県内の若手建築家が70名も集まり、自由に語り合い、自主

松下 重雄

的に学び、切磋琢磨しています。そして、私達の活動をサポートして下さる多くの素晴らしい理解者である賛助会の皆さんにも囲まれ、隔世の感を感じません。



さて、JIAは今、永く懸案であった建築家資格「登録建築家」の試行がはじまり、激動の建築界に新しいページを開こうとしています。他団体とも良く協力しあって成功することを願っています。ところで、“40、50は鼻垂れ小僧”と言われてきた私達の世界ですが、2年前に還暦を過ぎた私もそろそろ次代の若い皆さんに手をとっていただく時がやってきました。最近、ある本の『正しくなければ成功できない時代がやってきた』という見出しが目に止りました。「正しい」とはどいうことか。それは、嘘偽りが無く、倫理的であり、法令を遵守し、社会正義に則ること、とあります。『入札によらない設計者選定の制度改革』、社会に対しJIAでなければなし得ないと思われるこの問題を、私なりに手を引かれる前にもう少し見える形にしたいと思います。長野県はこのことに前向きです。長野県から日本を変えるかも知れません。勇気をもって次の時代に渡せるようにどうぞ皆さんの力を貸し下さい。育てていただいたJIAへのお返しのために…。そして、我々の生き残りの道として…。

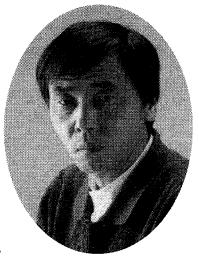
## 「大切にしたいもの」

保存問題委員会の委員を丁度満期となる6年間、務めさせていただきました。いまは後事を無事川上さんに引き渡せて安堵しているところです。この機会に、保存問題委員会ではどんな事が話し合われているのかを、クラブの皆さんに紹介したいと思います。

先ず、委員の個人的な人脈を通じて入った建て替え情報等について現在の状況調査や該当する建築のデータ収集を始めます。それを基に月一回の委員会で、JIAとしての対応を協議します。周辺住民や関係者が保存を希望している場合は協働して、所有者と話し合いを持ち、事情を伺う事など出来ます。そうでない場合は所有者に会っても貰えませんので留保になります。建築家が保存要望をする意味は、重いものがあるので要望書は慎重に取り扱われます。要望書を出さない場合もあるし、仮に出したとしても殆どの場合は取り壊しの運命が待っています。所有者に拒否されない限り、見学会は必須条件です。見学会のあとに協議では各委員の感じ方が大分違います。建築としての完成度、保存の状態、地域住民の親愛の度合い等、またオーセントシティ（本物性）にこだわる委員もいます。私個人としては、建築家の情熱と職人の意気込みが感じられる建築に感動します。そしてその建築が地域住民に愛され、親しまれているならば、残していくべきだろうといつも感じています。6年間保存問題に携わってみて、建築や建築家に対する世界観も随分広がりました。と同時にこの国の建築文化の未熟さも痛感しています。実際のところ、建築家の業績は完成するまでに注がれた

依田 政司

情熱と汗に対してのものです。その後の建物の運命は、所有者、管理者や地域住民の熱意や愛情が社会情勢の変化に勝るか否かにかかっています。戦後のこの国においては、法規や社会制度は新築を主流としています。それが建築を文化の一要因と看做さない、先進国の中では稀な国にしています。



では、建築の周辺環境についてはどうでしょう。私たちが日常暮らす小さな地域の単位を仮に「まち」と呼びます。

「まち」には里山や小川やハラッパがあり、人々のふれあいややすらぎの場となっています。このように人々にとって大切な自然環境がなぜ簡単に破壊されていくのでしょうか。

それは人々にとってあたたかく、懐かしい景観を形成していた古い建物を大切にしてこなかったこの国の意思（政策）によるからです。建築家が町並みや、建築と自然が織り成す景観を、護っていくとする意思是、新しい環境を創出しようとする「設計」の意思と同じものの筈です。だとすると、丸山さんを中心として「保存問題長野大会」を機に始めた「残したい建物調査」は建築家の新しい職能の一つとして、とても「大切なもの」に思われます。長い時間と労力を要する作業ですが、是非継続をしていきたいものです。そこで培った経験や知識が新しい価値を創出する「設計」の際に生かされたならば、輝ける「信州建築」の明日があるものと確信しています。

## 継続には知恵を！

最近の経済状況は、私達の実感とは程遠い“回復傾向”にあると言わ  
れている。それは大企業や都市部を中心に進んでいるからであろう。

我々多数会員にとって影響の大きい中小企業や、地方にクライアントを持つ者にとって、この現象は、必ずしも喜ばしい傾向ではない。今後さらにこの傾向が強くなればなるほど、私達を取り巻く状況は構造的な矛盾を含みながらより一層厳しいものとなるだろう。業界内でのサバイバルをも強めながら、生き残り策のための努力の結果がはっきり現れる前夜の様である。

日本建築家協会も、一昨年よりのCPD制度の実施に続き、昨年から「登録建築家制度」の試行をスタートさせることになった。資格制度をめぐるこれまでの歴史を考えるとJIAにとって大きなターニングポイントとなるものである。

この「登録建築家制度」には、期待とともに一抹の不安もあるが、第一回目の「登録建築家」が誕生したことは、我々の姿勢を示す社会的な意味が大きいと言える。引き続き会員の登録参加を積極的に進めていく、長野県クラブでもさらなる理解を深める努力をしていくべきと考えている。「CPD制度」と「登録建築家制度」は、私達が自ら学び合い、切磋

高橋 重徳

琢磨することで資質と能力を担保し、社会に対する我々の責任として「資格」をはっきりさせることであり、JIA会員にとって将来必須の条件となるものである。さらに、JIAは職能原則と倫理規定を定めていますが、活発な討論を重ねて今の時代にふさわしいものとしていくべき時に来ていると言つてよい。



この様な活動を通じて、より社会的職能の認知度を深め、さらに社会的信頼を獲得することで、自らのポジションが達成できる希望に繋がると考えるべきであろう。

JIA長野県クラブも各種の事業を実施することで努力をしてきており、更なる知恵をしづらり進めなければならない時期を迎えている。

大変で難しいこの様な時こそ、多くの会員が力を合わせて協力し、社会に対して自分達の独自のスタンスを明確にし、強くアピールし、正確な情報とメッセージを送ることこそがより重要になると思われる。会員の皆さんの一層の奮起を期待したい。

## 第12回文化講演会～建築家・横河 健氏講演「モノづくりはコトづくり」～

片倉 隆幸



第12回文化講演会は、建築家の横河 健氏をお迎えして開催されました。私たち建築家協会の雑誌・建築家2003/6月号に『第11回 CPDわが建築事務所の軌跡「モノづくりはコトづくり』が掲載されています。その中には苦労された「クレヨン時代」からの事務所の軌跡が語られ、最近は氏の事務所 The Terrace

にてカフェもオープンされてご活躍中です。

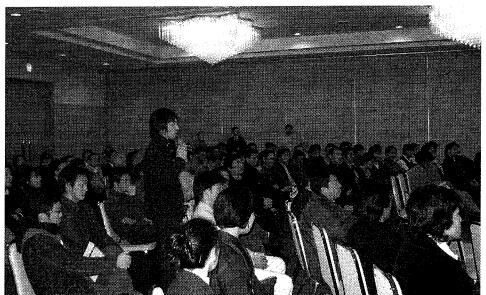
僕自身は、1990年の都市住宅「コスマス」に衝撃を受けた。30代前半の僕はこの時、横河 健という建築家は並々ならぬ人と確信した。内部の変幻自在な空間演出と細部にわたる細やかな表現は、模型による十分なスタディと氏の建築への愛情を感じる作品であった。

僕もまた住宅に生涯を賭けようと考えていたので（今も未熟ながら住まいの設計に燃えているのだが・・・）この時の作品の緻密さ、完成

度の高さと内容に加え、生活の気配と生活者を尊重していることに感動したものである。最近は、住宅設計家も住まい手の意向を尊重する方が増えてきたが、少

し前はジャーナリズムも特異な建築家をもてはやした時期があった。

住宅を目指して、最初は宮脇 壇氏にあこがれた。生活者



への配慮と奮闘ぶりは私たちの手本となった。

横河 健氏は、生活者への配慮もさることながら、そのやさしい表現が、ともすれば建築空間の緊張を欠くことを恐れたに違いない。時に吉村順三的であり、時に情念の作家・斎藤 裕的である。揺れ動く気持ちは住まいを目指すものとして誰でもあるが、住んで気持ち良く、作品も素晴らしいければ依頼者として文句はないだろう。

横河 健氏の公共建築も考えは同じだろう。生活者へのやさしさと共に、貫かれた思想、建築愛が大切であり生身の人間の感情を動かすのだ。建築家の創り出すものは、生活者を包みこむものだが、それだけではいけない。氏の講演会を進行しながら強く感じ確信したことである。

まだまだ書きたいのだが、西沢委員長からの依頼字数が終わりである。横河先生のますますのご活躍をお祈りし、またこの文化講演会を支援してくださった後援団体はじめ賛助会員の皆様、市民の皆様、事務局はじめ大勢の会員の皆様に心から感謝申し上げ筆をおきます。今後とも文化講演会を宜しくお願い申し上げます。



# 信濃毎日新聞社本社ビル見学会及び技術交流会

荻原 白

地上12階高さ60m余りの信濃毎日新聞社本社ビル現場は現本社屋南側にあった旧印刷工場等跡地に建設されていた。現本社屋上空に7mオーバーハングしておりこのオーバーハング部は、4本のコア部組柱と頂部大組トラス梁で形成されるスーパーフレームから吊柱により支持されている。この架構の組み合わせによって基準階有効面積1,100m<sup>2</sup>無柱の快適で使いやすい事務室空間が確保でき、災害時にも新聞社の機能が継続できる様に免震構造が採用されている。現場は60%の進捗状況で、外装は一部低層部サッシを残して完了。内部は各階共仕上工事と設備ダクト・配管配線工事が作業員160名によって行われていた。今回の見学会にご説明とご案内を頂いた、日建設計の高村設計室長・建設JVの金丸統括所長／松浦課長様に感謝申し上げます。最後に現場内では職人さん達が「こんにちは」「ご苦労様です」と見学者の我々に挨拶を交わしてくれて、本当に気持ちの良い現場見学会であったことを付け加えます。



## 保存問題群馬大会に参加して

赤羽 吉人

2月28、29日の2日間、前橋、富岡を中心開催されたJIA関東甲信越支部保存問題群馬大会に参加した。JIA長野県クラブからは10名が参加し、皆さん昨年の長野大会を懐かしく思い起こしながら、楽しく参加させてもらった。

初日は前橋、渋川の見学会。街並みの至る所に大正、昭和初期の建物が残されており、街としての歴史を感じた。中でも旧県庁本庁舎の保存は、当時の空間構成を残しながら市民の交流空間として再生された手法はすばらしいと感じた。多くの若者たちに使われている現状は、的確な保存、改修が行われることの何よりの証であろう。

民家再生の実例としてJIAメンバー須田氏の実家を見学した。既設部材の再利用と現地産材の調達に須田氏の拘りが感じられた。

2日目、富岡製糸場は今回のハイライト。木骨煉瓦造倉庫、保存状態もすばらしく、世界遺産への登録を目指す活動を県民運動として盛り上げていこうという試みも頼もしい。

## 広報委員会より

### 西沢 利一

県クラブの連絡事項はJIAニュースを主として、会報は会員、賛助会員の方々に奮起や感動を与えると思ってきました。

JIA本体の活動もいろいろな意味で風雲急を告げてきましたし、グローバルな2011・UIA大会東京誘致の活動も始まりました。

先日、私が出席したリフレッシュ・セミナーでの感想は、ローカルも、グローバルも一貫したアバレルな動きだという事を実感して勇気を持ちました。

これからは会報は大きな視野から県クラブの活動を支えていきたいと思っています。

それが、物づくり、人づくりにつながって行くような気がするからです。

## 2004通常総会記念シンポジウム

日時：2004年5月12日（水）P.M.3:30～P.M.8:00

■第一部／パネルディスカッション P.M.3:30～P.M.5:00

パネラー 大宇根弘司氏／日本建築家協会JIA会長  
赤羽吉人氏／JIA長野県クラブ会員 川上恵一氏／JIA長野県クラブ会員  
久保隆夫氏／JIA長野県クラブ会員 高橋重徳氏／JIA長野県クラブ会員  
西沢利一氏／JIA長野県クラブ会員

コーディネーター 松下重雄氏／JIA長野県クラブ会員

■第二部／研修会 P.M.5:00～P.M.6:00

『なぜ今「ケンパイ」が必要か?』

講師：権瓶 莊兵氏（株式会社建築家会館・取締役支配人）

■懇親会／P.M.6:00～P.M.8:00（会費¥5,000-）

場所：ホテル国際21 長野市県町576 TEL.026-234-1111

当日同会場では、長野県学生卒業設計コンクール2004  
入賞発表展が開催されます。

## 会員情報

### ●退会者

正会員：羽生田建築設計事務所 羽生田八郎氏  
賛助会員：中部電力㈱長野支店 木下 繁氏  
日本硝子建材㈱高崎支店 丸山 義幸氏  
長い間ご協力ありがとうございました。

### ●賛助会入会企業

※3月31日付け入会企業  
よろしくお願ひ申し上げます。

・有限会社ECO代表取締役 依田 幸則氏（丸子町）

### ●社名変更（改正名称）

※3月31日付け申し出分です

・㈱INAX様→長野支店削除  
・中信電機㈱様→長野支店削除

### ●賛助会員担当者変更（新担当者）

※3月31日付け申し出分です

・酒井硝子建材㈱ 酒井 秀和氏  
・㈱ニュースト 篠崎 康憲氏  
・トステム㈱ビル関東支店長野営業所 篠山 英一氏

### 編集後記

広報委員として2期、4年が過ぎました。この4年間で建築設計を取り巻く環境も大きく変わったように思われます。

公共事業が大幅に削減され長期の不況も相俟つ現状は厳しいものがあります。

未来も決して明るいとは思われませんが、冬の時代を生き抜く方策を私自身はJIAで得たと感じています。あとは実践あるのみです。

山口 康憲

皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。

編集人／西沢利一

発行所／JIA長野県クラブ 長野市南長野野妻科426-1 長野県建築士会館内

作成／アッカグラフィックス

/新建新聞社

発行人／松下重雄

TEL:026-232-3897 FAX:026-232-5303 E-mail:jia-naga@jeans.ocn.ne.jp